

1 卷の一

雜詠日記

海蝶夢話

卷の一

二〇〇六年

市井一人

詩人荒川洋治は現代詩を西洋由来のものと考えている。「詩集を出したい」という思いは、こういうところに根ざしている――と。

もつともだいじだと思われていた経済や、法律や、医学、工学といったものとはちがうところで人をつくってきたもの。ひろくいえば芸術。その芸術のなかでもつとも低いところを流れているもの。そういうものがこの世界にあることを、たとえ詩ということばが思い浮かばなくても、何か別のことで、人は思い描くことになるのである。

「この気分は、短歌、俳句という日本古来のものとの接触からは出てこない。西洋から来たものである」と言っている。そうだろうか。詩心を限定しすぎてはいないだろうか。中国の文人や胡志明は詩文を荒川の書いているように考えていたのではないか。ハルドゥーンが詩にあればどのページを割いたのもイスラム圏にその気分があったのだし、仏典が韻文調で作られていったときにも、詩とそれに対する人間の態度に根づいた関係があったからだと思う。『古今集』撰者が「いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける」と言ったのは、この国にもそのような心の姿勢があったからだと受けとめたい。

その文を書きとめたのは、もちろんその主張を大いに尊重するからだ。現代日本の精神状況の下でその言葉は貴重だと思う。現代を詠うためには現代詩でなければならぬことを、俳句を日記に書き添えるようになった最初から認めていた。詩人の努力を支持する。この古びた雑詠記録は、そういう気分に応えられてのささやかな営みにすぎない……。

### 3 卷の一

一月一日

大空に雲ひとつなく内海に波ひとつなく初日が上がる

大鷲が居つく渚の初日の出

居ながらにウィーンフィルの曲に酔う半ば夢中に元日の夜

一月二日

志ん生のめでたい嘶初夢に

一月六日

「愚行を嗤い考課を心裏にまで及ぼして省みる。  
聊か文字を連ねて詩に擬す」

稀伴語友頻雪雨

遠山詩仙不訪我

海蝶籠蛹独耽思

掌中胡桃只呵々

一月十一日

曾祖父の葬儀へ曾孫連れて行くいのちの法は思議もかなわず

一月十五日

なぐさめを孫の笑顔に寒の日々

一月十七日

M・ウエーバーが言う、「精神のない専門人、心情のない享楽人、この無なるもの」。ああ、実にそういう人間があふれている。

「サイの角のように歩め」

虚栄ではちきれそうな者のことを韻律に乗せるな、  
酷薄で心情の卑しい者のことを歌に詠むな、  
不正な小人達のことを短い句に差し挟むな、

ただ、天地の間に満ちる諧調を聴け、  
すべての生けるものたちの志を言の葉に拾え、  
方寸の胸に広がる宇宙の賜物を受け取れ、

夕刻、稜線が一瞬くつきりと見えるとき、  
単騎浩然と野を行き、嘯け、  
天と地と人を静かに讃えて。

一月二十日

二つ三つ母音の響く声聞いて我が口からも意味なさぬ音

一月二十一日

枇杷の花ひそやかに咲く夕間暮れ重い腰上げ新年会へ

幻影を探す電飾残る街

一月二十二日

甘酒で肚を暖め元氣待つ

音もなく冬の花火や「誰<sup>た</sup>ぞ彼レハ」

火炎裡の我が道場に雪便り

わたしを無傷に保つ境地はわたしにはゆるされていない。

一月二十五日

狂操を去り喧騒の中に居る

一月二十六日

そろそろと氷る歩道を武蔵の野

一月二十八日

「人生の真相」 荒川洋治に教えられて

人は、そのいのちよりも

心のいのちを救うべきだ、

詩人の散文が教えてくれた。

スポンティニアス シンメトリー レストレーション

一瞬、身心を貫くものがあつて  
世界がすっかり新しい相に変わった。  
生きるとは心のいのちを救うこと、  
わたしは本当に生きているか。  
しみじみうれしい心持でいるか。

一月三十一日

「調子はずれの七行十七文字」

かすみを食つてひそやかに生きる者に  
帷子を哀れんでまだ寒の内というのに  
詩仙が山からここへ霞を送ってくれた  
霞というより糠のような雨にも見える  
この糠を食えば腹の足しになるだろう  
さて何かうれしいことでもできようか  
かすみとも糠ともあれこれほどあれば  
いさかいの鬼心を豆で逐いはらえ

二月三日

わが孫は鬼を恐れぬ豪のもの

二月四日

花道に雪景色置き冬が行く

南天に実と葉の雪と春立つ日

二月五日

衰弱を母にも見せず清冽な最期をとげた人を弔う

誰の死とも告げぬ喪中の葉書出し位牌置く間に寝起きする夫

二月六日

牡丹雪見る間に積もり夫婦鳩軒でたじろぐ名のみの春に

詩仙という言葉が頭に浮かんで李白の生涯をまた百科事典で見る。あわせ  
て杜甫についても。二人の大詩人も世俗的に幸運な人生を歩んだのではない。  
その詩心だけがそれぞれの生を生かしたのだ。本当に生きたと言えるだろう。  
ほとんどすべての当時の高位で名高い人々の名が今では重要でなくて、苦勞  
しながら生きた詩人の詩心だけがわれわれの魂に響くものを残した。

二月八日

理性無くただ忙しくするここは名のみ大学立ち去るべきか

太い蚊の飛ぶ眼で山の雪望む

二月十三日

空が晴れ渡って冷え込んだ朝、まばらな枯れ木の多い林の枝々をほとんど真横から朝陽が照らし出した。

夕方少し暗くなつて帰り際、東に向かう道へ出たとたん快晴の空に大きな円い月が出ていて、思わず「おお」という低い感嘆の声が出た。

revelation、霜の林に射す朝陽

キホーテは望月に会い感嘆す天地はめぐり今日また新た

初春の月夜赤子をよくあやせ  
(太陰暦一月十五日、月齢十五・五)

二月十四日

軽ろき身や春の嵐に舞う紙片



二月十五日

甘酒で春雨煙る野を愛でる

三寒の後の四温も今は春

二月十七日

天分かつ雲一すじへ土筆立つ

(卵とじを食べて帰省)

二月十八日

係争の山の立会い椿見ず

春寒や小心者の胃の痛み

二月二十三日

朝靄が身を初春に連れ戻す

陽の力首光る鳩睦みあう

二月二十五日

レーザーに射抜かれてみる異相界

眩む眼でなお暗視する老いの春

雨だれの音しきりなり春の闇

春の夜の雨やや多情犬吠える

二月二十七日

紫の雲がたなびく春の暮れ今日の形見をひそやかに編む

かつお菜と蝶の子を煮た汁にする

娘が「ギャー」と叫んで虫に気づいた。

蝶めざし『図書』食う孫と遊ぶ宵

精神「情報に自己修正的に対応する能力をもったシステム」

二月二十八日

暁のしじま震わせ鐘の音がわが身心を目覚めに誘う

三月一日

網膜に世界のさけ目裂孔を光で縫ってまだこの世見る

あちこちに傷を抱えて横たわるなお幾たびか春を尋ねる

都市を見る猫鳴く春夜光る眼で

三月二日

如月のかすかにまぶた開ける月

三月六日

杉檜無量の種子を解き放ち大海原の樹林を目指す

(花粉症か)

三月八日

七人の敵へと向かう老騎士を姫水仙が門で見送る

三月十一日

人皆がコミュニケーション障害者とくに支配の欲望者たち

G・ベイトソンの本を読んでいるとそう思えてくる。

三月十四日

気がつけば雪抱いてある春の夜

三月十五日

雪柳そよぎ詩片を撰集す

片々の花々を漉く春の風

それぞれに旅立つ者の経路積分

(path integral)

三月十九日

鈴なりの黄櫨の実がつくる華の界

三月二十日

目の前のこのシステムの病理見る短絡的な目的に病む

三月二十一日

ベイトソンの「精神」学びわたくしのまわりの網目美に近づける

身心に鬱血抱え『精神の生態学』を手探り学ぶ

弱る腸に小ぶりを選ぶ彼岸餅

三月二十五日

春風と寄せる波見て牡蠣を食う

浜の上鳶を浮かべる春の風

三月二十七日

蛹中でこの脳揺すり春の夢分析されて思索さまよう

少年もカプセルの中脳検査かならず深く思考へ誘う

三月二十八日

土降って地と人の時埋もれる

三月二十九日

静謐に花咲き初めて更ける夜

四月二日

義隆の墓所花盛り難事あり

あれこれの決断迫る花に風

大内義隆の逡巡は破局へ帰結した。決断はいつも誰にとつてもむづかしい。決断が適切であったかどうかは、事が一応の決着をみせる時にしか判明しない。

四月六日

赤牛と草に腹ばい聞く雲雀

四月七日

六時十五分ごろ起きて顔を洗い、集合の時間までまだ間があるので一人散歩に出た。宿泊所は起伏のある草原の中にあり、東北側の外は林になっている。

その内側を周回する散策路を進んだ。朝霧がこめて、若草の生え出した道は火山性の黒い土が昨夜の雨のせいもあって湿って柔らかい。窪地になった池に、鴨など数種類の水鳥が、水に浮かんだり岸辺にたたずんだりしている。土手の道を通り過ぎると何羽かが飛び立った。そこから先は、両側に桜を植えた並木道になっている。桜は本木で五分咲きの花が霧に朧になって、進んで行く者の心を静かな思索に誘う。林越しに霧にやわらげられた朝陽が花を明るく照らして、気持ちをややかにする。しかし、しだいに霧が深くなり、浅い谷の向こうの斜面に十数本立っている針葉樹が輪郭を失って一かたまりの薄墨のシルエツトになった。桜並木越しの高岳の山容も霧に没していった。小鳥のさえずりに注意が向かい、静寂が深まる。

ふとロシア映画の「戦争と平和」でピエールとアンドレイだったか、落葉樹の大木の並木道を連れ立って歩く場面が想い浮かんだ。葉が落ちて春の木々だったと思うが、とにかく美しい自然の中を歩む人間を視覚化した映像に幸福感を味わったことを想い出す。人間は対象を視覚や聴覚でとらえて感受し心を動かす者だから、自分が自然の中に抱かれて動いている情景を一体としてとらえることができない。ただ感覚を研ぎ澄ました精神を活動させることによってイメージを構成するしかない。映画の中の俳優のように優美に振舞っているわけ

はないし、実体は平凡な何ということも無い顔をして自然に浸っているのだ。それでも、この落ち着いて幸福な身心の状態は貴重なものだ。このような時間を得て、何がしかよい人生をつくることができるだろう。

右に折れると周回路を中断して牛の通路になった柵になっている。道を引き返して今度は桜並木を下っていった。来年どうするか人生の岐路に立っている自己を省みながら、ゆつくりと霧の中を歩む。まだうまく鳴けない鶯の声がした。鶯は歳を重ねても春先には上手に鳴けないのだろうか。

霧こめる桜並木をシテは行く

露踏んで朝陽が照らす花仰ぐ

若草の中に立つ木々包む霧

霧の中桜並木の岐路に立つ

-----  
幾層も地層をつくる阿蘇火口地層のちりとなる者として

黄と白の蝶、白と黄の菜の花に

四月九日

夢覚めた花海棠の散るこの世

現し身で芭蕉の友となれ胡蝶

四月十四日

齒を見せて乳児が笑う柿若葉

春の雲分けていずこへ月の旅

四月十五日

霧の中登つて下る鏡山この生土に返す坂道

沐浴する楓若葉の中の風呂

四月十五日

巡る春花咲く畑甦る

頬撫でる海棠の花散らす風



春の海黒く白波起こす風

葉桜は古城を過ぎた年知らず

(名護屋城址)

四月十七日

悪しき知を持たぬ者待つれんげ畑

四月二十一日

今日生きて散る山吹の残像を

四月二十二日

小でまりが濡れる乳児の風邪の咳

四月二十四日

たけなわの春、筥で食う夕餉

四月二十六日

限られた窓でわたしは世界見る深度と視角いつも問われて

実際、職場でも家でもほとんど同じ窓から景色を見ている。

四月二十九日

葱坊主蝶に夢想を覚まされる

ひと時を止めてかげろう志賀の海

四月三十日

太刀魚を食べる休日心研ぐ

五月五日

智慧求め千のちりめん食べる朝

右往左往している。

時と場の条件の下その度に一回性の選択続く

五月十日

つつじ見る過敏に風邪に抗う日

孫の咳わが身に響く若葉雨

五月十七日

地の底を這い野苺の滋味に会う

五月二十日

あれこれと思案を重ね日々過ごす孫と一緒にまた風邪引いて

五月二十一日

青い実の枇杷置いて行く日を期して

五月二十六日  
卯の花に雨、良寛の心塞ぐむね

寂寥を消し得ず墨の夏衣

人間の四季を見つめる禪師の眼

人間の条件を詠む良寛の詩に展転と動く魂

五月二十七日

餅を背に餅を踏む子の初節句

(子はそろばんを選んだ)

五月三十一日

事成らずなお倦まず在る五月尽

六月一日

早すぎたトンボを隠す靄降りる

口閉じて肚を固める麦の秋

『良寛詩集』、五言の部の絶句に入る。長いものと比べると、絶句が難しい

ことがわかる。成功したものとそれほどでもないものがある。偈と詩として詠まれたものの差もあるように思う。押韻などを嚴格には守らないという形式からの自由もこの最も短い漢詩形に対する困難を増すかもしれない。

結局良寛は、「心中の物を写す」という格律によつて、詩もしくは偈を漢字によつて表出しているのだ。思想を深く詠もうとすれば偈に近づき、もつと体感している気分を歌おうとするとき美が伴うのだ。母国語ではないし、語彙を広げようとする欲をそれほど持つていなかっただろうから、中国の詩人ほどの多様や華麗を求めることは酷だろう。良寛の詩の偉大なところは、どんな詩人にもひけをとらないほどその詩を生きたということだ。そして絶えず自己の内実を深めたことだ。そのことが人の胸に響いてくる力を生み出す。

わたしは季語も和歌のしきたりも平仄も押韻も知らずに雑詠を書きとめてきたが、それは良寛が既に切り開いていた道であった。

六月二日

時失せて夏の夕べの憂い顔

六月四日

禅を深く修行する良寛の思索を表出する詩偈の連なりの中に、ある人に送った戯詩がある。「浅間山頭猿風を捫る、白井江上人鯨を釣る、麻の衣に隠元帽子

「応器手に持ち錫振り鳴らし我が家何処と問ふ人有らば須磨の磯辺の鷗の兄（あにき）藻草攪寄せ火吹き著け空臍（したはら）叩いて天下太平」。

訓み下し文は意識していないが、良寛は多くの場合、漢字のつながりを音読したものである。それが仏典を読む僧の習いであつたろうから。しかしこの一首は、七七調で訓読するのがよいように思う。良寛は戯れ歌としてそういう調子で読んだのではないだろうか。七言八句の中でおもしろいと思う二句は破格の六言だ。しかも、歌枕の須磨という地名を採って彩を付けている。対するに生地出雲崎は、芭蕉が「荒海や」と詠んだ風雪の地である。それを山中で歌っている。山中にもかかわらず鷗に身を喻えたのは、杜甫の詩の漂う沙鷗をひいているのかもしれない。この戯れ歌は、大きな視野でいなかびた情景を詠みこみ、やせがまんをしている自己を笑いながら、それでいて、その生き方を肯定し強い覚悟を秘めていると思う。

その良寛の覚悟を見習いたいものと思ひながら、戯れの一首。

花紅葉夢見苦屋に身過ぎする白砂の潟の鷗の舎弟

待つ人の声にもおじする蛩

初節句祝う子が見る螢の火

六月五日

六月南山没雲氣

幼筍伸長母竹疲

在麓鷗弟不修禪

猶負輕荷欲養志

六月六日

紫陽花を胸室に生け美を保つ

良寛の時代に、新潟県の海岸に「峨眉山下橋」の五字を刻んだ橋の杭が流れ着いたらしい。感興を催した良寛が詩を詠んでいる。峨眉山への冒険旅行が想い出される。杜甫を讃えた詩もあり、浣花溪の名が出てくる。杜甫草堂も懐かしい。

六月七日

蜀犬も吠えぬ夕日にサツキ散る

ドクダミの花にカゲロウ舞う夕べ

「阿弥陀堂だより」という映画を途中から観た。監督は小泉堯史、原作は南木佳士という人。実に悠々としたテンポだが、引き込まれて最後まで観た。新奇や独創を誇らない、しかし人生の大切なものを見つめる映画だ。カメラワークがよい。ビデオ撮影のテレビドラマでは味わえない映像である。映画の主演女優の経験をつんだ樋口可南子の花のある演技、北林谷栄の老練、先日亡くなった田村高広の風姿。寺尾聰もこの役に合っている。映画を久しぶりに見た。人は四季のめぐる自然のリズムの中で生きる。今はほとんど見られないが昔はそうであつたろう人の立ち居振る舞いの美しさが、寓話のように映し出される。その起居の中に一つの精神の型が宿っていたのだ。

ゆるやかな自然の時と伴に在る人の立ち居を映画は描く

六月九日

海月が森を漂う田植え後

幻視する色と音との無い世界

(良寛の「髑髏」の詩を読む)

六月十一日

この歌は精神進化の探索と知る人間のひと時の歌

『Why we feel?』

六月十七日

田は植わりミミズ干上がるよい日和

六月十九日

セカンドオペニオンを聞きに行く。

公園の軽食堂に妻という病氣に出会い立ち止まる時

六月二十日

浮き草も育つ早苗田時計る

六月二十二日

我を供に紫陽花の色移り行く

六月二十四日

尊厳へ感情価値を高め得ることばを探し心耕す

半夏生灯を消す部屋に光持す

寝つかれず雨の音聞く半夏生

六月三十日

石油店閉じて見る間に夏の草

世界経済の変転の中で、「規制緩和」などと称する過酷な政策によつ



て窮する人がいる。

七月一日  
カレンダーめくれば夏のヨセミテの風吹き起こり光陰移る

七月五日  
歳重ねうぶな心も埋もれて振舞う者に変容遂げる

七月十日  
ガザ、イラク、アフガニスタンに銃声の聞こえる夜にハルドゥーン読む

七月十二日  
干す梅を載せた生垣濃い緑

夏の都市島影までの海見えず

七月十八日  
夕風が盛夏の間合い計る頃

七月二十三日  
孫の手が餌掠め取る鳶を指す

螳螂も腕まだ細い幼い子

泥みつつ人の事象は変転す雨のそぼ降る内海静か

七月二十四日

雨期明けず水岩走る峠道

老いの夏分水嶺を行き来する

七月二十七日

梅雨明けて白鷺の影川渡る

数千年数え切れない戦争が世界の十字路レバノンの地に

七月二十八日

人間をすべて手段とする者の専制を見る酷暑の下で

七月三十日

その生を惜しみ一声夜の蟬

八月一日

遠花火見つめる孫を抱く重さ

音だけを聞き書に見入る遠花火

八月二日

鏡の中黒いネクタイ結ぶ顔

炎天下白寿の人の出棺に我が青年の目を想い出す

同窓の年に四五度の旅行談自由な時の貴さを聞く

八月五日

食い踊る老幼暑さ払う宵

宵祭り設けて夏を遣る衆生太鼓の音に目を覚ます蟬

八月六日

カナブンが金色めざし投企する

八月八日

飽食の残資を寄せるレバノンの戦禍の民へ緊急支援

(U N H C R)

八月十一日

衰えをめまいして知る墓参り

八月二十一日

誇張した小説のような出来事を見聞きして知る人間の幅

八月二十三日

校正に冷や汗かいて夏が行く

八月二十七日

新涼に来る年月を思案する

八月二十九日

枝広げ立つ樹のように望み持ち無常を生きる心を保て

ヒトとモノと関係結びコトを為す網目の一つ諧調醸せ

九月一日

良寛の言語ゲームは繰り出され多層多面の事象を明かす

九月三日

初秋の古物の市で朱傘買う

(無位の身であるが)

心の字に黄の睡蓮を咲かす庭

(雪舟庭)

美の形五重の塔に見入る亀

(瑠璃光寺)

九月四日

飛ぶ虫を待ち憂い顔秋の蜘蛛

九月五日

秋の空未知への問いに冷や汗す

蛸を聞くまだ人の数の内

九月七日

天蓋の下、人工の舞台上、人の演じる華やかなショー

九月十日

迷いあり閏七月蚊のかゆみ

(今年の名月は十月になるのだ)

皮膚弱い身に秋の風咳誘う

九月十一日

駅で。

菓子店の喫茶コーナー窓越しにゴミ箱あさる男が見える

九月十二日

装丁に麦藁色を選び出し黄葉もみじの潜む秋の樹を見る

九月十三日

『良寛歌集』一一一八から一一二二番の自問自答の四首はおもしろい。一一八番は、「粥二合業三合をまぜくわせ五合庵にぞ君は住むなり」。良

寛にはヒューモアの精神が息づいている。とても共鳴するものを感じる。

ヒューモアを欠いた歌詠み何とする良寛さんに置いて行かれる

「相転移」と名づけた紙を仕上げつつ五斗米を辞す転機を図る

五合には三業含む良寛の厳しい暮らし凌ぐ微笑を

九月十五日

コウモリと聴く秋の暮れ天地人

九月十九日

柊を起こす鬼あり野分後

老人に來た梨を食う子も老いて

九月二十日

藤原の血筋を引かぬ無位の身も春日大社に遊山に参る

客を待つ鹿の立つ茶屋古都の秋

春日社の朱のエンタシス秋の暮れ

九月二十一日

国宝に諸仏叙されて彼岸照り

障壁画秘す御影堂秋彼岸

鑑真の廟に一輪曼珠沙華

朱と白の萩や二塔は西東

手の形が葉種の不思議古き京

九月二十二日

彼岸には美形におわす阿修羅像

九月二十三日

金堂の光に桜秋日和

(狂い咲き、本物の秋桜)

百舌鳴いて観音菩薩像の笑み

神品の笑みに再び会えて笑む

別当のイスラム学の大家にも会いたく思い大門仰ぐ

若鹿の声は小さく仁王像

喉渇く彼岸の暑さ二月堂

大殿の鴟尾金色に光る秋

九月二十九日

竜胆の一挿し運ぶ山の霧

山の気が竜の胆欠く身を洗う

菜園のメタセコイアの頂に百舌一人居て秋の気を吸う

「知る者は言わず、言う者は知らず」（『老子』）



十月三日

父母の栗にひと時憩う地の恵み

十月六日

運命と人事分け合う秋ときの中

十月七日

追善に智慧第一の人の法念仏場に説く智慧と慈悲

大日比三師の出た西円寺の内陣左右の柱に掲げてある文字は、  
「恒沙功德具戸稱一元」、「萬善妙體即名号六字」。

満月に月の兎の献身の説話を偲ぶその峻烈を

十月十一日

深呼吸光の粒の降る秋野

十月十三日

日本の企業税率は既にアメリカを下回ったというのに、  
この上に企業減税実施案国は栄えて（？）民の衰え

国政を司る者老荘の無為こそ学べ民草生かせ

十月十五日

孫の手を鎮守の杜の狛犬の阿形の口に入れては遊ぶ

抱く孫の靴脱げ落ちたこと知らず夕陽の丘の落葉を歩む

柿紅葉桜黄葉を孫と採る

十月十八日

槇の樹を見上げ構想練る庭師

秋日和木も人もみな乾きつつ

十月二十五日

麦藁の色の表紙の本出来て黄葉散る水身に流れ来る

十月二十七日

天高し人それぞれに存在者

十月二十八日

「対話篇」

さえない顔をしているな。

そうですか、三日前によい事があつたのです、

十月二十九日

「対話篇Ⅱ」

でもそれは一日も持たないんですね。  
そんなことを今頃知ったわけではあるまい。  
それはそうです、万事塞翁が馬と言いますからね。  
おや、智慧がついたと思つたがそんなことかい、  
この世のことは、そんな一本の、  
縊り合わせた縄などではないだろう。  
なるほど、無数の縄が網のようにあるのですか、  
それは嘆きの網という名ですか。  
いや、無情の網と呼ばれている、  
無常の網だ。  
楽しみはありますか。  
楽しまなくてどうする。

昨日聞きのがしたが、号を変えたそうだね。  
はい、海蝶というのです。  
ほう、秋水が海に流れ出て蝶になったか、

しかし、季節が一致しないようだ。

はあ、季語も知らないもので。

季語なんぞどうでもよろしい、

号はエスプリだ、言いたいのは、

蝶は楽しいのじゃないかということだよ。

なるほど、そうでなくちゃいけないですね、

ところが、つらいことがあると時々、

蛹室に帰りたくなるんです。

すると、絹を紡ぎだす種なのか。

いいえ、キャベツ畑の出です、

錦は織れませんがみずみずしい緑でした、

今はその色を失いまして。

色なんぞどうでもよろしい、その時のみずみずしい、

情感を保っているかを尋ねているのだ、

またキャベツ畑を訪ねているのだろうか？

はい、腹のへっているときには。

ユマニストに近づけるはずだろう？

たいてい名のごとく、海にいて夢を見えています。

海に！、それも大いに結構、

何か見えるかね？

水平線が。

その先に天空があるだろう、

夢を見るならそこまで飛び出すのだ。

ああ、海から天空へ…、天空へ…。

十月三十日

五斗米を五合に変える人の秋

詩才の乏しい者の「帰去来兮辞」は最小詩型の俳句。陶淵明と良寛の弟子になることにする。M・モンテーニュにも学ぼう。淵明・モンテーニュが自由な思索の生活に入ったのは四十代初め、良寛は十八歳で世俗を脱した。すると、わたしの修行年限は初めから足りない。

十月三十一日

朝寒に戦友として夫婦立つ

「対話篇Ⅲ」

あなたは、「海を越えて天空へ」と、  
おっしゃいましたが、本当に楽しめますか？  
かならずそうだ。

しかし、人の世を超えて人の楽しみがありますか？  
人を超越した清浄な楽しみがあるだろう。

それはどんなものですか、

あなたはそれを楽しんでおられるのですか？  
そのつもりだ。

本当に？

そうだと思う。

今日は立場が逆転しているな、

君の考えはちがうようだ。

わたしには智慧が足りませんが、

人はこの世界を超え出ようとするだけで、  
本当に超越することはできない、だから、  
この世界を知り尽くすことはできない、

十一月一日

十一月二日

と、思つてはいけませんか？  
それゆえに楽しみがあり、  
また嘆きもまぬがれないというのか。  
まちがつていましょうか？  
・  
・  
・  
・  
・  
・

カレンダーの残る一枚場に放つ海の紺青、迎える冬に

「対話篇Ⅲ」

このあいだはどうも押されっぱなしだったが、  
君の話はやはりおかしい。  
ご教示ください。

君はこの世は極めつくせないと納得して、  
それ以上踏み出さない。

でも、さらに超え出られますか？

超え出ようとする姿勢をうしなったら、  
停滞しかない。

はあ？

運動をやめることは停止だ、

蝶は飛べなくならないか？

海から天空へという試みを忘れてはならない、  
ということですね。

いや、君のその了解がいつも危険だ、

あくまで問い続けるのだ、

それを修行と呼ぶ人がある。

ああ、修行ですか、只管打坐ですか？

坐禅に限る必要はなからう、

君は、海にいる蝶だ、

飛び続けるほかになからう。

銀粉を大海原に、金粉を天空までも、蝶はちりばめ、  
海原は濃く銀色に、天空は淡く金色、蝶は消え果て。

暖かい秋、危機はらみ白馬行く

十一月五日



すすき越え海へ草矢と飛ぶ心

十一月十日

時雨降る五百由旬の時空行く

至りえぬ彼方行く秋追う日為す

J・ブルーノの『英雄的狂気』は、詩によるカタストロフィーあるいは解放、人を高みに到達させる言葉といえるもので終わっている。十六世紀にこんな本を書く男がいた。その男は火刑に処された。

十一月十二日

一筋の蜘蛛の糸飛ぶ秋日射し

岩頭が紅葉の中で空を衝く

岸壁の秋仰ぎ見る御同行

人群れて大つり橋にアリの列

百丈も紅葉の上で入日見る

日本一高く長いつり橋に立った。

十一月十八日

陋巷に冬の暮れ六つ既に暮れわが立つ位置をおぼるげに知る

十一月二十一日

戯曲「無理心中天の疎網」梗概

登場人物

ただパンのためになった政治家、

先陣を競って褒章を得ようとするジャーナリスト、

ユマニストの側面を持たない知識人、

社会的責任を欠いた官僚と会社役員、

目の前に見せられたものだけを見ている大衆

開幕前の音声だけによる場の提示

「敗戦」と「出直し」

第一場 「省みることの忘却・理念の溶解」(長丁場)

第\*幕 「戦争のできる普通の国へ」

第\*幕 「戦力を保持しない国の参戦」

十一月三十日

皮膚病に意気消沈し冬に入る

十二月三日

人の間を生死がさまよっている、  
生死を天地の間に定めて、  
地に足をおろしてまっすぐに歩め、  
海に出た蝶よ、君もまた、  
ただ海原を飛んで行け、  
息をつぐ波頭もあつて、  
飛び続けることができると信じて。

第＊幕 「教育を論じる資格のない者による基本法の廃棄」

二場 「若いジャーナリストの核武装論応援」

・・・

第＊幕 「二十一世紀の戦争」

終幕 「荒廃」

閉幕の声 取り返しようのない場での悲鳴

十二月五日

星隠す雲におぼろの冬の月天運示し光を注ぐ

十二月八日

雁の飛ぶ河原を染める枯れすすき

香り付き紅茶で忙中時止める

冬時雨喜悦を求め紅茶嗅ぐ

十二月九日

老人になった同窓相まみえ四十年の時巻き戻す

忘却に何かかすめる冬の宴

十二月十日

流紋に表わしもせず清冽な力を秘めて冬を行く川

全局の場の一隅の形勢を整えている行く年の中

十二月十七日

在米中国人の客と太宰府光明寺の座敷から美しい庭を見る。

紅葉敷く庭に初雪疊の座

十二月二十二日  
忙しく貧弱な日々柚子の湯に

十二月二十八日  
風雪を衝いて故郷の海目指す

十二月三十日  
荷を負って古里に在る年の暮れ

睡蓮の根を分けて待つ澄む水を

十二月三十一日  
行く年を海鼠突く人見て送る

水澄んで睡蓮が待つ明ける年

漆喰の修理のために棟に立つ事もなくある我が小天地

極北の星を見つめて月仰ぐ種の人の頬冷気が刻む



二〇〇七年 正月

徐山亭 謹製



『画家のノート』

アンリ・マチス

「幸福は自分自身から引き出すこと、たつぷり働いたその一日のなかから、また私たちを包む霧のなかにそれが作ってくれる晴れ間から幸福をひき出すこと」。

「心から、ひたむきに『歌う人たちはしあわせだ』。」「喜びを空のなかに、樹々のなかに、花々のなかに見出すこと。見ようとする気を起こしさえすれば花はいたるところにある」。

